

小論文 問題

問題 次の文章を読んで、教育者を目指す者として、あなたは「差別や偏見」をどのように考えるか、800字以内で述べて下さい。なお、考え方そのものは評価の対象とはなりません。

「ハーフでいいじゃない」

宮本エリアナ（ミス・ユニバース日本代表）

周囲との違いを感じるようになったのは、幼稚園のころ。新しく友達ができると、必ず「どこから来たの？」と聞かれたものです。日本で生まれて、みんなと同じように日本語で話しているのに一。

私はアフリカ系アメリカ人の父親と日本人の母親のもと、長崎県の佐世保で生まれ育ちました。いわゆるハーフです。佐世保は、通りを在日米軍の軍人が闊歩して、公園には英語の標識が掲げられ、九州にあってはグローバルな街です。とはいえ、日本人とアメリカ人の生活エリアは分かれているため、日本人として暮らす私は目立ったのでしょ。

今年の三月十二日、私は長崎県代表として臨んだ「ミス・ユニバース」日本大会において、日本代表に選ばれました。最終審査に先立って行われた約二週間にわたる合宿「ビューティ・キャンプ」では、ダンスやウォーキングなどのトレーニングを受けました。

反響は想像以上で、世界中のメディアから取材が殺到しました。

一方で、こちらはある程度予期していたとはいえ、インターネット上では、「日本代表にふさわしくない」「なんでブラックが選ばれたんだ」とバッシングの嵐となったのです。改めて自分のアイデンティティと向き合う機会となりました。

私が尊敬する「歌姫」、マライア・キャリーさんは、ブラックとホワイトの両親を持つミックスでした。幼少時代には「おまえは白人なのか、黒人なのか」と差別を受けていたといいます。それでも、マライアさんは「どちらでもない。私は私よ」と意に介さなかった。

子どものころ、私は自分のことを好きになれませんでした。肌は黒いし、「ハーフであること」はコンプレックスでしかなかった。

大きな転機となったのは、十五歳の秋、「自分のルーツを知りたい」との思いから、離婚した父の地元アーカンソー州の高校に留学したときです。当初、たどたどしい英語しか話せませんでした。私と似たようなミックスの子はまわりに何人もいました。自分が特別視されない環境は心地よかったです。ようやく自分自身を受け入れ、「私のままでいいんだ」という心境に至ったのです。

とはいえ、アメリカ文化になじみがない私にとって、現地での生活は一事が万事、戸惑いの連続でした。トイレに入っても個室のドアの下には大きな隙間があって、ウォシュレットもない。一方、帰国して耳に飛び込んでくる日本語にはホッとしました。

バッシングはどうしても目に入りますし、わざわざ「こんなことが書いてあったよ」と教えてくれる人もいます。でも、一ヵ月もしたら、吹っ切れました。気にしても何も変わらないから。

もちろん応援のメッセージもいただきました。特にハーフの子や、その親御さんからは「勇気づけられた」「子供の未来が明るくなった」とたくさんの声が届きました。私の存在がプラスの影響を与えている、そのことは本当にうれしく思います。

実は、最初に「ミス・ユニバースに出ませんか」と声をかけてもらったとき、あまり興味を持ってませんでした。

気持ちが変わったきっかけは、去年の春に私の友人が、ハーフであることを理由の一つとして自らの命を絶ってしまったことです。「自分の居場所がわからない」と相談を受けていた矢先の出来事で、彼はまだ二十歳でした。

ハーフへの偏見や差別をなくして、このような悲劇が二度と起きないようにするためにも出場することを決意したのです。

日本では「ハーフ・タレント」や「ハーフ・アスリート」の活動が話題になっています。現在二十歳の私と同世代が頑張っている姿は励みになるものの、最終的には「ハーフ」という区分がなくなればいい、と考えています。ハーフであっても特別視されない社会が私の理想です。（後略）

（文藝春秋 2015年11月号）

小論文問題

問：次の文章を参考に、学生生活において勉学とアルバイトはどのようにあるべきか、自分の考えを「800字以内」で述べなさい。

「ブラックバイト」

学生であることを尊重せず、長時間勤務や厳しいノルマを課すアルバイトを指す「ブラックバイト」。ここ数年問題化しており、各地で学生労働組合が結成されるなど対策の動きが広がっている。

休憩もない。シフトを強引に変更される一。無理な働き方を強いられ、授業や試験などに支障が出ている学生も多いという。労働環境の正常化が重要であると同時に、学生たちに自分の身を守る知識を持ってもらうことが大切だ。

アルバイトで働く高校生が8月末に結成したのが労働組合「首都圏高校生ユニオン」。厚生労働省で会見を開き、力を合わせ問題解決に向かう姿勢をアピールした。

このうち飲食店で働くメンバーは賃金計算が15分単位の切り捨てで、働くたびに不払いが生じていたのを仕方ないと諦めていたが、「声を上げていきたい」と話した。

学生アルバイトの塾講師を中心とする「個別指導塾ユニオン」は6月に発足。母体となった「ブラックバイトユニオン」に届く悩みのうち、個別指導塾に関する相談が多かったことから独立した。

これら次々と誕生しているユニオンは労働相談に乗るとともに、会社側との団体交渉などを通じて労働条件の改善に取り組む。街頭宣伝を通じて社会の関心を高めている団体もあり、若者が力強く立ち上がっている印象だ。

売れ残りの商品を買わされる。最低賃金を下回る一。事例はさまざま。弁護士などでつくる市民団体「ブラック企業対策プロジェクト」は全国の大学生を対象に実態調査を実施。希望しない勤務シフトを強いられるなど「不当な扱いを受けた」学生は7割弱に上った。学生を都合よく働かせてはならない。若者の周りに十分な相談、支援体制を整えたい。

問題が顕在化した背景には、労働市場の変化がある。働く人に占める非正規労働者の割合は2014年は37・4%。人件費削減のため、正社員が担っていた基幹的業務をアルバイトや派遣など非正規労働者に頼るようになり、過大な責任を負わせる形態が出てきた。

また、正規雇用の親が子どもの学生生活を支える構造も不安定となり、学生が簡単にアルバイトを辞められない状況もある。個別の問題としてだけでなく、社会全体の在り方を見直すことが不可欠だ。

被害を防ぐ上でまず力になるのは知識だ。厚生労働省は学生に対し、雇い主から契約書など書面をもらって労働条件を確認することを呼び掛けている。アルバイトも残業手当があり、条件を満たせば有給休暇も取れる。これら実践的な働くルールを中学や高校、大学などでしっかり伝えたい。

学業がおろそかになることで将来的に日本経済の力が落ちるとの指摘もある。が、その前に個人の自由や権利を侵害する行為は許されない。雇い主に十分な知識が必要であることは言うまでもない。

(宮崎日日新聞 2015・10・7「社説」)

小論文問題

問題 あなたは次の文章に描かれた父親像を子供の立場としてどのように考えるか、「親子の関係」はどうありたいか（自分の考え）をまじえて「800字以内」で記述しなさい。なお、考え方そのものは評価の対象とはならない。

最近のお父さんは子どもを叱ることができないと聞く。息子はまだしも、娘を「きつく叱ることはできない」と実際、はにかみがちに語ってくれた新聞記者に会ったことがある。「どうして？」と訊ねたら。

「やっぱり嫌われちゃうと、こっちも辛いんでねえ」

なにを弱気なことを言っておるか。そういうだらしのない精神だから子どもが増長するのだ、まったく。と、娘も息子もない私は憤慨したくなる。が、ふとその父親の立場に立ってみれば、たしかに狭い家の中で可愛い娘にそっぽを向かれたり、声をかけると露骨に嫌な顔をされたりしたら、それはへこむだろうとも思う。そこまで思考が至ったとき、そういえば昔の父親というものは、子どもに嫌われるかもしれないという不安は抱かなかったのだろうかと思問が湧いた。

ウチの父は子どもの態度、口の利き方などが少しでも気に入らないと、たちまち癩癩（かんしゃく）を起こし、みるみる顔色が変わった。その直前まで、どれほど家族が和やかに食事をしていたとしても、一瞬にして豹変（ひょうへん）した。

「なんだ、その生意気な言い方は。親をなんだと思ってる」

「誰のおかげで学校へ行けると思ってるんだ。誰のおかげでメシが食えると思ってるんだ」
そして最後に必ず。

「文句があるなら出ていけ。義務教育のうちだけ仕送りはしてやるが、そのあとは、野たれ死にしようが、俺の知ったこっちゃない」

たとえ自分の側に理があるように思われ、父の言い分が理不尽と感じられても、口答えは許されなかった。あんまりだと反抗心が煮えたぎり、出て行けと言うなら出て行ってやろうと、秘かに貯金箱をひっくり返してみれば、これでは三日と生きていけない現実にぶち当たり、一晩泣いて、心を納めるしかなくなる。

「養われているうちは俺の言うことに従え。原則的に子どもに人権はないものと思え」それが我が家の憲法、基本的人権第一ヶ条だった。

父の癩癩は家中に留まらず、いつでもどこでも、外出先でも他人の目をはばかりことなく放出された。私にとっての初めての海外旅行でハワイへ行ったときもそうだった。ワイキキの浜辺でふと、ホテルの鍵がないことに気づき、「父さんが持ってたんじゃなかったっけ？」と言ったのち、私の過失だったことが発覚した瞬間（結局、鍵は見つかったのだけれど）、父の顔は真っ赤になり、世にも憎々しげに私を睨（にら）み、その後、歩いてホテルへ帰る道すがら、どれほど外国人に振り向けられようとも堂々と、私を怒鳴り続けた。あげく、部屋に戻って私をバスタオルで殴りつけた。

癩癩を起こした父の、こちらを睨みつける憎しみに満ちた目を今でも私は忘れない。もっと穏やかで優しい父親だったらどれほど幸せだったろう。そう思ったことが何万回あったか。しかし、癩癩を起こして娘が詫びて夜が過ぎ、翌朝、私がしおらしくしていると、不気味なほど父の声が優しくなる。

「わかったならいい。今夜は旨（うま）いもんでも食いにいくか」

思い返せばあの瞬間が、「娘に嫌われないため」の小さな配慮だったのか。父の巧妙なやり口を前にして、娘の私は恐怖から放たれた安堵（あんど）感とともに、そのとき再び、涙を流すのであった。

（阿川佐和子「子供を叱れないお父さんへ」より。文藝春秋 2015年8月号。一部改

変した箇所がある。)